へ 13
2132
30

文選臥坐序

廣し狭しと論ずる事て花嫁の店をろしま。ひしと雛。大鵬ハ北海も狭しとし小尿ハ雛妓も廣しとせん覗機の千畳敷も廣てさと

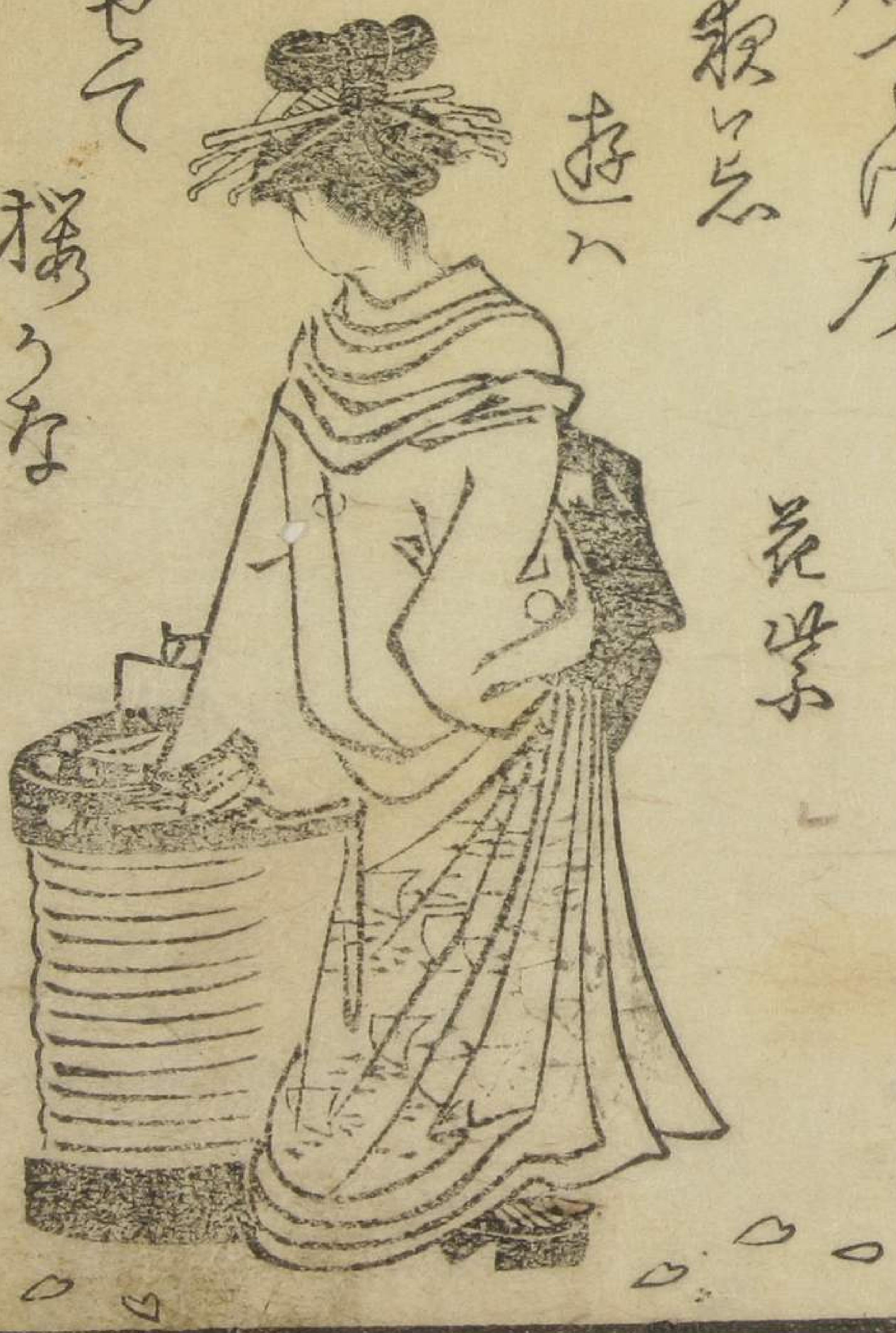
南新二藏書
饗庭文庫
30
ヘ13特
2132
30
43

思(おもへ)バ廣く。狸(たぬき)の陰嚢(きんたま)の八畳
敷も。狭きとおもへば狭し
されバ店子は胸(むね)の廣しと
いへども。大家さん尻の穴(あな)は
狭きにきはまれバ。爰(ここ)に何(なに)
某(がし)等(ら)が述(のべ)し三(さん)編(づん)也

妄(ひ)言(ぎ)あり。其趣(おもむき)遠州濱
松にひとしく。廣いやうにて
又狭し。故(ゆゑ)に同国掛(け)川
の産(さん)なる。文(ぶん)選(ぜん)卧(で)坐(ざ)也
題(だい)をそれや卧(ふて)に狭く
坐(とる)に廣かゝんと云ゝ

山東居
京傳序

寛政ふた川
戌乃春日



居つけ乃
親に忘
遊ハ
せて
櫻かな

花紫

文選臥坐目

○東北乃雲談
○北廓の奇説
○河東志艶詞

文選臥坐

○東北の雲談

狂亦作

いざこゝろみんとよみしかの好色も其名を蜆子に残して亀戸の流れにとゞめ又は葛飾の郷実は[illegible]の梅ん子に営る茶飯の物價高く蔑れ心池の藤に取郷の色は深蜆をと味ひ秋の龍眼寺の萩風流士乃

目を悦(よろこば)しめ糸ハ妙見(めうけん)の松風颯(さつ)々の声(こゑ)をのづから人耳(じんこ)を楽(たのし)む四(し)季(き)ハ此景(けい)物(ぶつ)如此(かくのごとし)安(らく)なん市中(しちう)のかしましさを避(さけ)てハ此地(ち)あらんと世事のさはさきハ健啖(だんとく)の馳走らにまかせ[illegible]假名鶴(うやだし)の別(べつ)荘(さう)子風雅と洒落(しやれ)をあらいまかせの滝(たい)に結(ゆ)ぶする建(けん)仁(にん)寺垣(がき)の竹(?)好(ずき)もん切の植(うへ)込(ごみ)に

ごろれきんうりとつんせ伎藝奥の一行ある張雑(はりまぜ)の風炉(ふろ)先(さき)屏(びやう)子隠元(いんげん)譯(そく)庵(あん)の筆(ひつ)意(い)をあ門む椰(やし)子口れ菓(くハし)器(き)庚(かう)申(しん)棚(だな)の飾(かざり)附(つけ)ま与四郎が風流(ふうりう)とらむ定(ちやう)容(さま)れたぎり時なきぬ松虫がと獨(ひとり)ごと閑(かん)然(ぜん)とる折(をり)ら庵(あん)主(しゆ)ハなとるうの町会のたゞと同處のおんなの十ならりまてゝめいふとうれき行の小袖まうさゝ仕立の相織伊勢ド田のゆかき（たゞとや 宗たつ）いりあおじやのとりくえながら

いかゞんじますとなんとされるなるたらしに
あるものじや

亭主 新でん 大じんや新ち弟子としてとみる町人の若衆さまよ茶人
なれバわしやうれしいのぞる 大ていはすいりやう ホこれ
む袖なし羽織あつめへひきさ茶をさえてる しが
は多宗（さそう）子お湯（ゆ）ぐくりりよい雪（ゆき）ではないか
かねこれま庭（にわ）の景（けい）色（しき）をはらいじろ
コレお茶を上（あげ）ねへか

女房 おとら よういう出るされ きらいもあるしゃう
づけれはモキヤ 宗たんさんよりお出なさん（いりゆう）
しもシイ ただこゞ旦那のもどざうや

ぜんおさのんナイス

多宗 浪花（なにわ）より今度（こんど）ハ雲（くも）井になされ又葉（これ）がち
うきよのじや

おとら アイどふでござりまし
ておられなんし舞（まい）をとくべつけてれ
和（わら）のハいろうサ子

多宗 左右（さゆう）じや

トあるまで取へ下女
香茶をえんでくる

新でん せんど茶ハよふてる（あらゞ）
おこれをおゝぶり中一個では厭（とう）とも茶（トう）
とニツやく立出ス

多宗 コレハ和（わ）ンお手前（まへ）ちうどろうひトくゝ

香で是ハおふくかだん〔おけら〕ハ我屋の白桐がゝ出し祥瑞（ションズイ）の丼（ドンブリ）は雪花糖（せつくわとう）唐蜜掛（たうみつかけ）を入黒もじの利休箸（りきうばし）をつけておまちか〔多字〕コレハけつこうなお菓子（くわし）じや ハテ面白（おもしろう）そふなお茶でさんじや ト（多字ハけいこうの茶のけいと見へるほど）むちやなり〔新でん〕何じやらうな夕顔物サ〔多字〕茶碗（ちやわん）みる色（いろ）くがござるじやらうな〔新でん〕あ儀ざんじやアめへのサまづ御所（ごしよ）焼。渡唐（ととう）屋なぞがあるそふの

又ハ井戸。鉢司。棘朊（いらぼ）。三嶋手。和物でハ藤四郎の楽で朝四郎（ちやうじらう）。ノンコ。左（ひだり）楽。なんぞハちゞんでねサ釜（かま）も雲龍（うんりう）阿弥陀堂（あみだどう）。なぞハいゝねサ〔多字〕色く な名（る）がみなあんじやの〔新でん〕琉球（りうきう）風炉（ふろ）ふ。チヱカラ。なぞといふがありやス〔多字〕ハテけう（希有）な名じやなあ ト（これこれ まことに肉）深川の芸ども二階で清之丞さゝくいゞれまでいゞへかりの者り 合羽まて来り 次の間うく声ござ

ぎし【三人】（きゝれをとまどく　てあらさうする）【彩でん】此雪ふるどふか
て此世界（せかい）でころぶばかりで出かける
のじや【拍ワリ】こんちくへらんちんト【与志】
今日ハさる客人（きやくじん）をおくつて二ッ目
をと系（せい）りましてゆくへさいわいとおくらず
途中ましく【清三】こふお庵（こん）を見渡（みわたさ）し
さ両ハ魚（うを）つんせの二だん目といふありの
ぞのう【三四】切幕（きりまく）から籠（かご）をさげゝく

出かうといふのさ【彩でん】雪月花（せつげつくは）三
ッ此雨といふが雪など風流（ふうりう）なものハ
あるまい酒ですら銀世界（ぎんせかい）じやト（おもゑ）【かや丁けい】
茶どうめんのお合相さいこゆぶん鳴（あく）字めり
仲人会かりぼんと新がらへ参り
よ泥雪哉（ゆきかな）。雪似鵞毛飛散乱（ゆきハがもうにゝてひさんらん）をよみ
合羽（かつぱ）を着て立て誹諧士（はいかいし）ハどうで
ぜんへ　ス【多宗】此人ハなんやロぜるとやら（ねうざい）
ましいぞ【丁けい】コリヤア　おもくうがん負

与清 三ぼう どんゲイヤアレづれもお揃（そろ）ひで（三人口ぐに）まことにお見にかゝりませぬ すゑ さむうさあんと ヤア いつ雪じやアねへろへ此雪は関に居（ゐ）なさるとへ大先（せん）生（せい）でもあるめへ三ッぶとんにぬくまりの竹村の上あんで揚屋（あげや）町の不明（とい）が所の八重垣（がき）なぞをチヨビとせんどへどうぞてござんへせう（トしてぶ〳〵女房をよんで）ホイ是れ額（がく）へ大ふそうむきモミ今のうちそでござんへス（ト香と出す） おまつ おまへひとりもね（ト どしても いぶ） 丁ゑん これへへいこうれむさしぼうべんけい〳〵 清之 丁けいあ久（ひさし）くお見にかゝらぬうちどうぞお酒落（れ）がありさゝ〳〵 彫ぞん 来（く）るとそふぐしいおしゆうがつコレちつと煙（きせ）をつがんせへ おりう コレゆきや茶の間（ま）れ

炭(すみ)とりて来(き)や〔下女ゆき〕ハイ　ト持来る〔三四郎〕わくしがつぎませう（トあらくしとゆあと　ずくつぎながら）こゝまで丁けの柳廓(てう)へどうでござりますそ　どぶろくらうらうてさげのござります〔丁兵へ〕イヤモウ　ねかへり星(ほし)らんりサ　ハテ子　雛鶴(ひなつる)さんが出(で)るし〔丁兵へ〕籬(まが)えら〔与吾そ〕琴(こと)ゞでる　小ざくら　しもつけあんく　ひつこむ喜山(きざん)千山(せんざん)もひめて居る〔清三〕

それでハ二丁目も松葉屋(まつばや)であだりになりましたね〔三四〕志らしこゝさ山(やま)とさきハばひ二まいがひゆうだんがようござりますそ〔丁兵へ〕錦戸(にしきど)もよし　豊住(とよずみ)もさろいのサ〔おりう〕角(すみ)の玉(たま)やのこむらさきさんも出(で)なんしたね〔丁兵へ〕とゆふさ角玉(かくたま)の花紫(はなむらさき)咲(さき)ハらくしいけのさ〔おりう〕それじやア今ハ扇屋(あふぎや)の瀧川(たきがは)さんなんぞがいゝち

あれさへ女房気ざね【丁じ】そうさア鴛

鴦もちとりめがあろうもと【とき】丁子さん

や扇屋さんハどふでござりますも【丁じ】か

まくぞぜん盆さ【三四】ワてうしハまだ綾

錦さんや玉しきさんとへ新く万遠て

きこへぐとゑません【丁じ】どれもそうへく

しらよかくらひハきこへてるごらう【三四】と

これハおれさきさ【おう】花あふぎさんがよ

もかういふしハねへのどけねへうゝハねへ

【丁じ】でへぶ新造を出きてそふサ【多字】その

花あふぎといふハアノこのめぐりれいハずへ

額をとてのうちよいぞぶアでならうか

【丁じ】何サその花あふぎうゝ今の六三

代聞さ【多字】ハゝアそれならちうごろ

又できたのじやふ【与吉】とかく角玉の

しへいワけがうけるりつさい【彩田】

（たばこをのんで／ごまかしてみたるが）なんとモウ女房れ店おろ
しをいてるげんにはしめえらおもしろくも
ねへ勤番部屋の日手ちうじやアお屋
めへ　ト（えんじゆうとあるはしらさのうちの女房／よハ新田があたりの王女ふかよらどろ色へ）
三人の非で言いへをごしく△（これよりひろがさのつく合／命席ぜんの吸物などをく）
（まむきらみらふさと笑のなり／出湯るり　まある）丁只　玉碗盛来琥珀光とさるぶ（ト及／あの）
あさをゑて鰒とんとりひきや　よね　いんのろよ
かしさな物忘とお笹負られさ　清三　て

うへ命ぢご　丁只　西のをきてまんながたえ
奴鰒の味ひしらゝる風流な体をりんさや
つれあいて　清三　お盃をおくれでござる
三四　こゝろみせさ　ちむゆんき　多宮　これハ
よひあへ気らましと　おこ二ほぐれびらうの
あるのじやとてこのはちそうあけとし
みへお飯をきこ　おまつ　おこ二多宮さんへ
湯とあがらぬくらそれがようらふ香

やおもちやと捨て菓やそしてそのそこ
のあま戸(ど)のあさゑ人を捨てきや
下女言 ハイ（ト唐人りあくの／さ拗をおする）丁児 振新(ふりしん)がお
くり物をもしけるやうにしておそくるの
兵(ひやう)るどんなそのけまらう出しちやアこ
ぬくうちつとえせなせんナニダらうこそ
こぶまきうころアいまご おとう たんど
ふめなんしおまへまやアしくべきせぬく
くら 丁児 おきやアがれつきぬけとうん
てまくさなもとしみあ々さやふちんと
ぞうられしいおめをした おとう そのう
ろうり京町へいきあんしくらうまい物
とのけておさんもそぶらう よめ言 ハテナ何
ぞ新狂言(しんきやうげん)ができましたぐあ 新田 頃日(このごろ)
れ大の色法師(いろほうし)サ 丁児 あんどんそてきの
あやがくびよかららい屋がくるのた文(さく)

がむしやですりこんでめのとさまやア

ぬく【吉】おそろしく【おてら】何さんく

てもいゝそうぬく〳〵【多宗】いゝこんなのしかれる中

えのおあんといふ者で若しがままじくちとお百ら

まとしられのいろくて何ら志てぬがお

りしろそみなるのじやぞ嶋峰（おく）こちらも

年（とし）二十ぶふ五ろくんは角力（すもふ）の争（あらそ）ふ

ならうよ【丁以】土肥（どひ）の次郎でおしなれ

あさんおまくなぞもさぞおつ〳〵ぶ

あそんでくらうね【多宗】志ゆうくなるすけ

こちらがのいゑるが出（で）段（だん）の若野郎（やろう）よから川

おさりのなりじやうかいりふおちなあしに

なる程のなりもないじやそれも今はこ

ちよんで本宿の二階（かい）やうあぎやを

中宿（なかやど）まして じゆうりふこんちやげふ

【清之】イヤモ今は大ぶんぎゆうぎうつ多う

なりましく【多宗】五しらがやつらり川

した時分(じぶん)ハあそやえしいうすどやて
すきたのもろこうしとらずんでその
せろハおしゆうもまあ青梅(あをめ)縞(じま)がうねのるす
で儀(みさぎ)莢大(ふよう)鵆(ちどり)の常がゑらうをやり
ました 与吉 それハえしいうすでござり
ませう 多宗 さよじやまづ渡りでの
高尾(たかを)と云ハ某様(よまふ)といふのじやこれハ
又あをとえしいうすじやがこうしらも[illegible]

み笑(さい)さだろうじや が某様といふハ仲間
のけいやても数名(いくゐ)が某やといふさじや
そこで某様といふさけがある文耕(ぶんかう)が作
東都(とうと)著聞集(ちよもんしう)と云写本がある某様が
鴫鴨をとえあしさるをとあてさが又三浦
の薄雲(うすくも)が傳(でん)子も云本の勝山が傳よ
も鴫をたてあしさとらふするがあるがい
づれが何てとやらこれハむちやじやが

その條も二分ぢやの茶釜ぢやのと
いふ金銭（きんせん）子いろいろがありましさ
で 丁臣 ハテナア トゑらくひとりごと までしばらくのてい 文字 明
ふりくらしれおいとめぢや是はちよつと
およりアていろいろ御ちそうよ致まし
と 彩田 てア御用があらアおそうなし
さいナ 文字 イヤ今（てい）晋は店の息災須
錦ぢやさらいは店をろうしの袖是附

あがらせぬばなりませぬあまりおも
しろさとんざうをぬらして立ぬ
したる分振ゆうとおそらしなされ
や 彩田 御身（ごらう）がみんてへぜひもないことを
いく 文字 おキ 雪（ゆき）もあがんくそそふ
ト文字は 之手清三 人にこうし流しとそれや
くる
おいとめ 彩田 うくるきあう見がひるト縦くう
南アあうと出し二分 サア そふでものんで
いう小出ひかうて

うりたまへ（ト）悦ひ、**三五作** コレハありがたふござりまするモシ此志んぞう様おありがたふござりまする　トくるしき事する女房ハ何ぞ剣がみえて次の間へ立けるは彩田三五人の弟と丁稚とふ何か耳うちをする同人うなづく　**三五人** サアくしんまでとんでもさいせんがぬへ此をまく　**おはる** うんなんぞへ　**三又** ハイくいろもおかしくら太きよござりまく　**丁ち** おれもうくりやせうキト剣があけど

おてる そんならはじめにけんなんぞね

彩田 おしまひハマアあそびぬへ奈　**丁ち** ぢさまいろそめくりませ　トこゝろよく

おける ゆきやこゝらをとりこぼけや

下女 ハイ　ト乗てきづける　**おはる** こゝろくまをもとイ　こゝんのやうがちやうどよふござりまもちろしておそうかゝりやせんから

彩田 イニ二ヤ　酒とのんぞらくのみせて

げりいさゝ衣そいらんせへ **おこう** アイ

彩田 そこの中へよみかけの本をとつてくりや **おこう** ハイー（ト本を取来る折から どこからかつかい来り下）女手紙をもつてくる 女房うけとつて彩田にわたす **彩田** （ヨシ田よ 喜六ゟ）どこと うら寒さのぞつウ 永徳屋からじや（こゝかへ）急用とあるがなんじやろうへ（ト火を入）て封を切り ナニ〜 いける店他ツ居る茶碗に（見ん）候（ト中ぶんよんで そぶくおくさ）こりやちよつといつて

こざアあるめへおりう若旦那をとこさつくりてくださせへ **おこう** 何の用でござりやせぬ ば雪子までておいでげく あるけあくりれ中ハおよしあさんれば いて

彩田 イヽやりよいりう坊へと十右衛のそんがあるか **おこう** それでござりさ もうござりや中ゟ中きつ由へ（トいつさいは 郎おいりと云）おのかとんご中きあちをもつめつまで 又云て云 らくあるものゝて 十右衛のそんがあかりとさゝさて

どうやる
きりみありそんなら名物を出しやせう
う七さんへをおつまみなんしへ【彩田】
併ハいゝねへ【おいら】アゝおいしいへんあちん
しへ【彩田】ちんれ[illegible]のヨトそこしへ（してかゞみのまちくり）
でみかけるけれど浅ハ万八にのて女房を一ッだん
りくらぬ彩田が丁じのまさしき粗とあいつさん
あの女房丁じもちじめ【丁じ】かせ上使の
二人の誹れ話あらそて居る
粗とハいうまく【彩田】ちんぎり
せこゆかべ女房をえらんさうら一ト

女房ドやアどうしてよくきぬへ女房
といふ者んハぜんてへおそれる中にぎ
とうふ女ハ【よね】でききてとりますさて
ト二人女房女まで見ぶれをおどし出かける
は世界吉原か深川かその見えを志らぬぞ

○北廓（ほく）の奇説（きせつ）　湖舟作

夫往古（それむかし）の勇士（ゆうし）も戦場（せんじやう）にのぞんで
再（ふたゝ）びくるゝなきを思ひきて当世の遊

されハ素羅に会て　めでたびすぐるず
をさへ其敵によりて変化まぎれ
むその客によりて寵愛するなり
為にこんでる中にハ他目にハ敵とみせ
ても心ハ実ハ味方にて謀をめぐら
してもあげる工面もなけれど女郎
の方思ひハまづそれけなく客の方
思ひハ多し　鈍の男も女郎買も唯

光るを以て貴きとなし大門の伏
勢にハ新造禿が連を乱してつけの
わるさ客人を生捕にせんと引ずり
ひんぞる客ハ羽織の中ずりするを
恐コレサいくらか放せよといへどもき
きかと逃るハ承知の幕そのまくれ
うちへいれて見れバ実ハ中にもあり
敵にもあり　実悪乃外男達勧善懲

悪のそのもとハあくあがり膳部あり
生悪を改めざるハ此廓なり月の
秋も悪の闇路のらうさと云べし
此世の中ハ大戯場下世あり〳〵
の騒動五ツ九ツ拆チヨン〳〵と提
此乃奥がゝりと見れハ舞台
正面女郎屋のからり先刻より格子
さいはまで〳〵してある一個の武士

其名ハ市多湯とやよにかくれぬ　蔦屋竹ちから
頭巾ハ山岡てめらの南京染らんハ思つむ
ござよ紅ら役所のあるをもそでめりさかあごの
下でひもをむすび羽織ハ上原の紋八丈様のある
かさねがさむくあいやうまと見て締をちよとある
いれさやうこび葉ぐん肉の小紋の小袖下ふよ
くさむひとつて染色の乃しめを見へる
下ふ丹後の黒紬よりえぐさのからし縞の小袖
帯よあさぎのくちらむくのどうを見へ
ちりめんの中糸りれからてかるさりめんの色
下白だんあうさの帯あさ上下丸ちもあそう流
まそめて互大小へかえぎとろめんのつらん鉄を
うけ白足袋とりおをちせんがうよ云せうふ
でまをあしりそのきれでちうりしと
中ぬきぞうりて外ーうりよまとさして　竹ちから

コレ〳〵おとふ〳〵 若者 （ござりじいまりよく出ろく）
ハイ〳〵あんでござりまする 行 ワーイおゆ
おみ様があるすむし 若 ハイ 行 あか
のるすでもござんぬへろしやア ハアむ
くの様（ちら）のいんでよらへゐしゆうと 黒
差てまゐる女郎とらいさくゑそが
あんとおみおそこと一ッあくどく
もちゝらいて女ら吉ゆらしらあ
われめへらむし 若 （むよへおりしけれどもちや ごまへよするさよあり）
ハイ〳〵むごいがんどふさでも旅二言（きまか）叶（はる）
ひましくのとおごしやましゆう サア
まんがお上りなされまし 行 そんなら
ゆるさんしゆれ ト（のり出人のうちくゆらう） コレ〳〵此
ぞうりぬる遠（きちう）へねへゆうにそのまゝま
まちぞや 若 かしこまりました 行 よく〳〵（あぐ）
アそれしごのおまへ大小をさし 若 お縁の おあしを（よあ）
（きてふらくして参る）

こちらへ 竹 そんならあげまするてへい
が見しげんハつう銭がかゝつてをるぞや
コレあんなろう見しげが名を書てれでも
行て来てらござれ（トいひながら若者の案内にて二階へよる）若
まづこちらへアゝくらひらうそくど
竹 尻のしんでうらふくとようとぼる
ともし（トてちがふて座敷へまゐり居ルよ迷ひ廊の君のまへへまゐる）
若 今晩ハだいぶ冷ますぞ 竹 あくどく

さむいるのむしー（ト若者ハ下へゆく竹ハあちらを見まハしあづまかりのうらて
ある紙さんご二入りあるおしゐぬ川床とやらさいのり
がくとやうかやまるふすまのさでことを出しワゞ
そのおもかげ流しれさせつてでのんで居る
竹がえん女郎のさぞこゞえん言跡おまゐり）若 モシ
おかみさまもうしこちらへおより
なもんてござれませそれへおいらん
がおいでなされまして 竹 心得ましく
（遊君女郎出るまでハその座敷お風俗ハ此
まはり手竹さんハ行かりのひさそうにこまかのの
うれをとえそう若者の名をとるる又女郎を
ワくいふとてろーして居る 初会の座敷ハ廓通でる）

（てられるもの沢山あるの縁をとそこをとも）[行] コリヤアハチ、扨まお聞よかうりましさ（おやーの女郎怪みつんとござりまする）[若] チトおもじめヤませう（トまことしつゞくるくとまりしさゞさの中とよく志めしそのそ）[若] たぶかり振あがりさし上ませう [行] いてゞきますをべつがむし（ト女郎をさんて）てア風亭（ゑひも）ゐよう風ようあきれぬきもしられハア國の嫁かあへるとやア別様があって女郎も買ましさが

風雅地ドヤア いかなすよふうぬるのむしりしもく（トよく見てひねりて）名りアこうやアいゝく風念のいれて風洒ドや（トまりしくの人で見）まひやところより半紙の四ッ折の高くちり紙をニッよこりてるくかよりそとそしさとえさうしろを出しくの半紙でさうざさをかさどちんまさうづさ蓋とてまおお女郎のおまるをし

[行] コリヤアハアいゝさぶくのでるおもぞおアまよぐるでぶむし（トささやどうく女郎へおしさをとく維よかくし）てゐるるがとあるよそて女さ出ますをや二階もみざあるよあるいすのもあの新造へ申し

【怪野】「蜀のや紙をとごしてくろや【行】これ
めんなさろ褌をとりまさござや　コレわ
ねろむし茶碗へゐのを一ツ　おいさむけ
なさろ【先】アイ（ト出て行きかゝく　あらてゐを持来る）【行】ころや
アハアお世話なさんごむし【怪】きやゐ
をおあんなんさをのく【行】どうきおめくへの
まぬるのむしー　こふまるるのむしー（トゑひながら）
（麻の褌とぬきさよくのしてきりとうさしこゝみ　ひざの下へしきをりんで形りひざをさゝげるお
ちくしこくてゆけ　兒二ツ三ツある）【怪】キヤそうきなんもて麻（あさ）
とごふしんをぬく【行】かゝしぬへと
いよゞうくきいがでゝきてありまうさ
ねへ麻屋へハゆずれきちうとぼろキ
りくとあろてきますのんざむし
（まちこさゝる）
トいよへ褌をコレハくよさしゆれがいて
かうなされてハ以来別懸て来るよ来
みくひるのむし（トかれてれ時うりゆうとさう　むらひよなる女ゝもけやおゝらん）

きりの出ざるとおりくどみさ山王のけるじやれを
きくうハましみてもとしあそぶころにあり
怪ぬしやアなにかかんのんさんへでもおまゐ
んなんしたのかへ**竹**さようさイヤそう
じやアござんねへがぜんてへ上方の
大夜根がけへにおかうてくへがむし法附節
ぐらのるじやアあるし法家中のて
けへ流なんぞがこうりふとけへでも来
てゐんと口論でもおこりそうならく

六ッと数くらむしらもう姫毎月
ひごとに三人で出あるく役で番附
番があんそ来年もとがむしやア
先（さき）の月からお弟様をとゞみぞくなし
ようそさがどうもお番のうち
まゐりましくしみ君（きみ）があんそれど
あげてくれぬくくむしどうもとうろ
れなくござんとぶ同役のぐらちに一人

ひんこゝろがありてそのむづかしい男と
むりよ妻になんさくらゆへしみらん
でまましさアげくにこゝろしく思ひて
時刻到来（ドらくとうらい）ざアむし（トまじめになんに性をいふちなまへ来をまつし）
若 チトおちつくへ 所 イヤくおりまひ
めをそふ見でもらしくごぜんぬく
怪 チットお休なへしと申てもそのさ
所 フウちらしハ又こゝろに此菩提（わろう）にあらん

さらて又外の座敷で菩提にあらず
うとぞんじさげくふびんちくでむし
なんでらんなかにもおぢづくとなるもう
とさしひらくでも縁（ゑんハ）あへけアやアあら
ぬくるのむし（トひざのたへとむてあらうて居るぬるをとうをとおし）時
まえがうかよいさてくのんござむし 怪
てうづよお出なんせのえい菊のやた
れまうしや 売 アイけふ旦どうアと

おきゝさまへ〔竹〕ゆれ〳〵あねさん宵（よい）
ッうらじへはお世話（わ）ござむし　これむし
〔禿〕あんざんまへ玄がでんしさうへござう
ざんまへ〔竹〕あんどとむし〔禿〕見んちや
アヽびんらりしんきてョいんつとむし
くとおいらひまんをかへ　細（けぢく）でもてん
しとうと見ひしてョ〔若〕チトおやまそ
みなされまし〔竹〕よふくじへまそく（のどかよんくよ）
ほりひざでこまる〔若〕おつとあをいてできまし
ゆう〔竹〕とも切ましさ（トいひながらふところより紫ちりめんのふくさゝ包より三寸ちやくのつさまるとちめんのふくを出し中よりらんぶの絹の給のきされて白くあんつくる金入を出しうみよりへがしてあとのあとかつゝつと出し）女郎へい
くらじや二朱かむし〔若〕あのおかれ
お存知でござりますそうら一両で
ござりますて〔竹〕よし〳〵（ト半紙をと二ツよ打かつふとのせて出入）
〔若〕ハイ此様嬉しう〔竹〕ナイ〳〵

なまを代物ハこしらへて渡しさぞや

若 ヘイこしらへはおうけとりやまし

さ（ト若者下へ出てかめんてこれまでのぞ てゐて来るまちこれ弐通もなにもなし）はこべてを見ドしめく 猫（半若兒ハ立覧ドて長刀）

ぬきさそうなめ若男を少しへぞそね

な入怨坂も長刀かまへ一生よかゝるをま

ちかるがいらんで怨坂さそくとふみ

バッ。テン。イヤア。テンく。ぱッくテンく ヒヤア。ラリ

ウ。ヒヤウ 。ト（志ぐしとこさせるで火たちのふちを さいてみるゆくあひ方女がおやしの）

まる 怪 ねしやア猫して何をおさうぎるか

んさく 竹 ハしとしく 怪 アノ子ハんちや

アあそこを呼でをうひしさう今の私

ハとんざつよひ私ざんさをねへ 竹 イヤ此

まへの牛若がとりふさてむ十三人の

どろぼうを同様に切ふせさ私が大

らんちくさりぎでゑらくつへいるす

むし 怪 なんぼう〱聞（きく）てくんなんでざんすて

ねへ外題（げでへ）ハなんとやらまう〱 竹 熊坂サ

怪 なんざんすへ熊坂とやらまう〱

今のなをとらんておきなせなんしな

竹 ハアそうやアそうとおもやアとん

ぐるすとうらうちつもれさア 怪

なんざんすへ 竹 アヽよげへなぐつおきな

とちのえをよんでみなれ 怪 つけへ亀

うへそこで手をおいてきなんし 竹 手を

こひでもよくげへそう 怪 ようござます

なぜへ 竹 アノワーし方の屋敷の御殿（ごてん）

なぞでへおかれてくれぬるすむし 怪

なぜでざんすへ 竹 塩でんでれ度（その）さあ

のめとめとまちがうらのるすむし

そんなこと手をとこくるすむし（ト手をやまく）

はまこ 亀 なんざんすへ（トまる） 竹 コレあねへ

おとなをよんでこられ 兎 そこなさア
なんのようでざんすへ 怪 ヱて モしもしがい
まいアやうしやア ワけへ乳をよんで
こきやア 兎 アイ ト廊下(らうか)へ（出る） 様ハドウリ
くく（トよぶ種あく 若衆さきり） 若 ハイ 何でござり
竹 コリヤアハア をとこ店を像(こらぎ)ぞ卯乃
とんじやア ねくへがワしらう日(どうや)夜が此地(このち)へ
出(まれ)りよ来(き)て在るかうワしが店門(かど)の札

をとこてめへのふちまんとしんてる
まッて隠ッをとらんさら志ゝせてた
めれそしてかうしさ承の時と云も
あアむしワくさるちうとまち
ぐわんざらどふそろんとうの隠
ツふ志ゝせてたのれ 若 かしこま
アましさ（ト出る） 怪 モシへ羽織(えおり)や何ら
とんてちんとお縁(ゑんそ)あんせんう

竹 そうきまさて へいト さようと ぬかさく
おびも

ところてんくろみうりぎとのしめへ
しんきよ神さてふしあがく
こうや

アハアこうこんドやアさまく

ぬくへきうし四ツまでのこんどのち

よまうんさ明ハきうり紙をあてく

よくうてむべい トいひあかうふんどし
をとこさひきめうて

とびは
ひもそび
怪 キヤぬしやア トあととい(ま)ぞ
おりくてあう

ぬとこさへへ おれられて 延くならる
てみる 女どもゆうく度くならう
怪 いんう

そさむひだんどヨ寂えとりんとお

うけあんしナ 竹 チイくうけまさて

べいそキアちやア よしつく かうて女いもう
くおどとあるあく

でもあくみるをどるおくひみもあくしやハしやあ
れどくろひとむひとくもろよわてハおれどもうどど

まんてみる竹さんもいうのもうくぞ
兵まぶまんてみるゆうくとあんさあ
竹 ハアこうり

してくるもハア他生の縁ごぶあんと

まうした江戸の子をちくとんべくおし

えてわされめへうむし 怪 こんちくうが

どふして江戸のことをしらんさそりの（ウトいはれりんとう之行ちやうが江戸といはれる衣かふのことをたくさんとつていふのなれど）

行 ナアニしらねへちつとはゑらくう

そふんべいハト（いはまた又わんりきちえ）

怪 ホンニ　モシヘさん

こきぬしのおはなしあんしておじやう

うとゆうどこともゆうれ女郎衆のた

なしとしておせうせなんしなへ

行 ヱ

し方の城下れ女郎しなぞいたなし

みなさゆうなかなかいるすむし村よ

けぢお川岸（かし）とゆう所があるげさ

が為せどこで女郎どうりで見をとるす

うむし

怪 川岸とゆこさへ女郎ぷり

川岸の女郎衆のるすサ（トいふちうのおいさんが女郎衆へけりらぞ）

行 極楽（ごくらく）よりましはいゝがある

ちうがあんときいてこりやまひうヱ

しれ茶屋へゆきことひが来るのところ

せまひ茶やがあんべいなんとひくさつけて下されまいら 怪 ぞいづんす（こゝらへどこゝがこゝらう あこれがやくよりて飛う） 行 どふぞ文の時ハそのまゝ手まへぞやこれハア江戸のいさうさときこぬがおのくなぞれハてアどんなおりのがきこえますんべいけ 怪 何がよふござんしよふがけんちらまもきれんせんが清めんかくてびろ

黒小袖と云唄がござんまて 行 つウそんなら小袖ハ黒がよいじやナめんけなるゝがあるわくゑ歳くるとい勤で大阪様から絆纏しさ小袖がある比把へゐるよいこれがよふんべい羽二重じやどやや黒羽二重じやどやそれよハアお仕立師が仕立そのしやうろむしおんとしてなきでもなんでもあくとく

よくげ〳〵をてなさあんぞでもくらしもと
とりありなさいりんでござらアむ
しなえましやう此羽二重じやぞや
（トつくりと女郎かゝてござりしまとこ〳〵てみなさいとりよくしやうじのそとによ）若二
モシ怪野さんへ唯今迄でござりま
す怪モシへ今起ッでござんさとしさ
竹ホウ今起ッあやうく走らせそ
おくるんで見うる頭る者よあんそ
札とよせてめくつて又来ませそべい
コリヤ要る得て居てたれ〳〵（トせなか）
怪アゝ〳〵お出なんし〳〵（トいゝてたちあがり）竹
（又さうぬをたら〳〵おめえまよまくらうがみの付くとまる〳〵ぞ手うじよめふくかでらく〳〵ふくへ出るおやしまもこれよさうよかうぐむ女郎しがり）竹（ごんをとりそんの大名ひなりしなり）
若ハイお縁の描竹コリヤハア旅
まあよ出るゆうじやそんぞうおしなふ
部の宮へ出してあくりやるナ若ハイ

おかゝおやなされませ **怪** そんなら

いつておやなんしへと（行ちがひのくれん ぐでずイゥ兄）

せと二つひと番所で一艘まつてひ出かけて江戸

百綱のつくせよも一艘を屋形につけぐし

△はいまかさゆゑいへまうとものまあ〱むぞ

つまへみそりのくい女が娘芸ゑ見えまでもん〱

まらいて仲の町へ小用じそれよりさんゞ

と一艘で物見まかり又一日ひくあるまで

こりそのあ

ことをえくまで

○河東の艶詞

谷我作

一艘のたまし とがね深川仲町

濱本ぬさんぞくつきゑ安がくの

声外安出て別く愛前またち

おかづらとりかねんあれぞお別系八

とめむぞありげへやのつけだん

乱安部のさて女き蔭子の中がれら

らのぞくもよくまるゆへお梅さん

との声とくざりよ立出れば芳愛

れいさけるだられにこうじ肴挑はさせ
ぐいのくれ酒中ハちれしかやけ
とまて露（つゆ）にて夜座にさまり茶を
一ッくんなも障子（しやうじ）ひつしやりのひと
まなどもそかあつうもきげまりお茶れ
は客あつりのある客中れバまんざ
らでも有りと思ふ程さんさ廓（くるわ）下
で船頭（せんどう）らのさあしをちつともとげ

と富倉のうりさげ弟子がうりだれゝ
てくといふはがりんざしへかうり又つきき
だらくさしこみあんどうれ次のうぶ
てみるを見だきさるせそぞてつんつめて
居る **客** **文好** （ぢつきいのあいさ男いんていふ石場の富倉にあらじみがあれどいでぢろ）
せられてみてらんやもいかさ取がおあげぬ者へせん
ききあくらく弟りしくされべさでとみぐゝの
るなごりう弟子がうりずんまり
で出るが弟子とりあそとしおめへあぞ
そねへはよさぐ **梅** チツト弟子がうる

るすがあるからサア文これきぶがくりれお
りうそふなるのごねなしてえん
しらさのきれるすもありそふなるも
のご梅これだんだんどふもいきれ
やせん文さ男よつてそのうしさな
らせんとりそれがこよしそじらう
梅色るすと去年がしれさてあれで
ぜくせんどよしそてえんちるがせりな

者が文おれがくさ男のせんざとさやア
さめへしそこでへまんざるでもおぼ
めくよきが梅そふいふすあるいけ
ど（トいひながらた もたことを持て出る）文コリヤアおありがた
さふでござりませて梅とんだ茶でござりね文
ゑんりよなくよしてて梅そんならてく
ヨウ（ト茶をのみあり つきりとつぎ）文これへあのんざ
の梅ぜんてくのまねへされども文

アノおめへがコリヤア　らりイかまよ
のりあはせて　梅　そりやア　いひあん
せなどとさんやしてみるのサ　ト（ぐいとのむ　そのちよくをおく）
文　コウ　のむかいぐのあんべおめへが
うんしんてるなアゆうぞこしい
つもろうちのりやうまでさゝを
ぶんてうまらねへとろあんとうで
茶わんざけもあんまりでおいらが

せうなたうねへやらうもらげくと
ゑんてふしせうきうねへ　梅　それこそ
まんてへねへそふゑうもござへしや
うがね　文　とんなうすぶんとけさ
せねへ　梅　まやく　富倉の女房らが
さいとう角（つの）でござへしやう　文　おめへ
でへぶつらう　ねへるすとしなせ　梅　か
くきうなせへさうな何もうもなんて

私しも 文 何かくもてめんど連(つれ)はなる
ゑどいくがあらァ いゝねへ ゑてござ
人へ修れは色男のやうだもて 梅 そん
なふいひよけと志なせへもなせえ
さらってもせく きつアやうはござへ
せん 文 ツリヤア おめへがそまも
あんとういつてくれるやうなくう
をとついてまつさかがあつておよし

まへそれどもどふでそふさてねへぐう
らうそもつうねへのサ 梅 とんだお
めへはせうがいごうアきてお妻さん
とやうがころされて[illegible]のを賀て
江戸へいつてまであそといひやう
だん紀(き)で 文 むりな文句よふ と筏
つけてるなといふめへびきう 梅 筏
わどおめへはうらなひやござく

ワちきがむりをいつてかなするぞよ
までぜがつうまてぞれんてへぞうし
およびもねへござ（トくらぞんでりんるをとふ）文 上
さうおろしころこげたことをあげ
やアしめへードレこゝがなひうあく
こめてうんゆう（トひあぐらをとつてひきよせる）梅 よし
あせへナ人ちぐへもおうひりんざふ（ト
うぬまんざうでもなく）文 ぞつくしもいてうげんぐ

いゝ（ト又しみこなして）梅 よしなまとんだわるじや
れて（トしなまゞでみせうち）文 そんなまつらくさ
まるねどりんくろひがまをうずみ
（トしなまゞで又あへる）梅 まぞうじごとろんて
そんなまあまそんでらんなせへさとなか
いやござよ 文 なまよいやざいやござねさとさ
まじいりりやアりんさで 梅 しれさ
るりんよいやござよ 文 こんひりのぐ

おれをとるが**梅**しれてるのサ**文**ほんとく

ドレまづよひ（宵）からろくにねねへが

つらをよくみせてくれウまづ歯（は）

は白（しろ）ひなちつと（気吸）へぞもうけねへで大

こゝにはうら大きさなのをとまんぞくぞ

がきうやアまア何といふ黒（くろ）でぼ（まま）れ

てそんなよこさづつゑてこんちく

げへざと思つてあるせうぞみといん

てめれがつけようのしこみんだり

ど**梅**なんなまはござなくいツてえ

なさるなそんなてへへをなくべる

ことアねへ**文**なくべるざアおれん

つれびんさしげ大きさに思ツあし

ぞアたちうりふしてもおさんの

すへねよたるかくねへへづ（ト立上りうがひする）

梅どうするので**文**うんちゆんてそけ

どふしやうが 梅 けへよそるすりハなかゝぬしへ
ヨトとびを（とりあげる） 文 なれくしハ女ごおきさま
しろ 梅 おめへのめふもなれくしい
とまへるか 文 ちへぬしへハ 梅 をそして
ちゝがこれか 文 何ぞゝがこゝろ揺
く 梅 どうどうちくハこゝろめへ
おめへがちんまちをとこてくれる
（き）ゝがおうやアこんやもうちがきれハ

かめぬへ 文 まづこれきゝとはくら
さきさんがゝゝしてこゝろてほがむ
むごくするかへ 梅 さいてもごぎも
ありてがなりア さいてらんぬしへ 新
けへかゝらんなるのをいふもあるかほし
いがおめへ 曲へなゝゝぶちころされても
いつ命ハいゝぬしへさきさんがあいそ
ばうしとおつさもおめへはぶされて

あざができるあをそだんくるせ
めてあざでもごいてねる寐ござとみ
念まなじみのあるもきんでみかし
さけもてあれるもせうちでか毎そて
きておよんでかるおめへさんまふんと
らんや出さのが百ねんめござんちも
そろねへのくの身ござってひさづ
くなる在でもござくかよしてらんねへ

なれ申してまるよひ申しさ（下男のうわへおおがどをさうつけ）
（てなをござぞらく）文なる程おめへも其のみなれさ
お梅さんかどおんそまれあるかのござ
いかなるそなもそふらんてられるこそ
ろござしとむまもる夫婦（ふうふ）でもねへとて
なるんやい病もみけるさがせへてえ
なしもできるねへ梅まんなくあとそ
のだんなてらんねへ文うるもあん

まりのうゥアねへがあんまりこゝろ
しらあるとおもふぜ詞おぬさ
ちろトヒツみくび

○弟とありふ屋敷まではしろうち
をとこみやるが彼かけまいらん
てねてきまへは来をおくれ

大尾

南新二藏書